

今年の夏は短かった。疫禍や豪雨さらには人災による土砂崩れと、次々に災難に見舞われ、夏を過ぎた実感が湧かない。熱海ではまだ三人の方が行くへ不明だそう、まことにお気の毒である。

我が家の猫の額ほどの庭で、蟬が這い出した穴を三箇所見つけた。七年の眠りから覚めて地上に出てきた蟬達には、こんなに雨ばかりの短い夏は残念というしかない。ただ一輪咲き残った百合の花井にしっかりとしがみ付いた空蟬を見つけ、セミを題にした歌を詠もうと思いついた。

● 空蟬は窓辺にありて過ぎし日の夢追う如くそらを見上げる。

窓辺に残った蟬の抜け殻は、見えぬ目で空を見上げている。何となく我が身を省みて、自分が抜け殻になっていないか、心配になった。

● 空白みときを惜しめる蟬の声短かき夏の恋を盡すと。

朝五時前に蟬が鳴き始めた。短い夏なのだから、懸命に恋の相手を探しているのだろう。

● 蟬丸を知るや知らぬや逢坂の琵琶の音真似て鳴き暮らすやも。

盲目の皇子が一人山中に捨てられ、琵琶だけを頼りに生き、後世に残る歌を読んだという物語はあまりにも悲しい。

● 蟬衣纏し人は今いずこ遠き昔の夏の思い出。

今は紹や紗の着物を着ている人を見かけなくなった。

● ひぐらしは秋の報せをもたらしして残り僅かの葉月となれり。

爽やかな秋が待ちどろしい。

● 空蟬に習いてぬぎたし八十さかの月日に生しわが身の殻。

我が心の殻は厚く堅く干からびて、青春のやわらかな伸びのある心を取り戻すことはもうできないのだろうか。

● 櫻葉のかげ薄らいで風吹けば蟬鳴く声もまばらとなりぬ。

うるさいとまで感じた蟬の声が今はいとおしい。